

訓女記山登駒西

佐々木木生

んで、駒ヶ岳の雄姿を眺めつゝ、午前六じ十五分電車は宮田驛へ着く、約三十分休憩の後、充分仕度を整へていよいよ出發する。皆元氣に満ちて歩調も軽く、一步々々大地を踏みしめて進み行く、約一時間位歩いたと思ふ頃、微かな疲れを覚えそめて、涼しい木影に腰を下し、始めてリュックサックの紐を解き、キャラメルを口にする。

誰も誰もの顔に喜びの色が浮ぶ。太陽も大へん高く上つたらしい。しきりに汗の流れるのを感じ不圖木の間から下の方を望はるか東方に天龍川が白い一條の布を引いた様に長くく眺められ、其の沿岸には植付の出來た田が、數限りなく列つてゐる様は田舎で無くては見られない田園風景の一つであらう。

それから平坦な道を行くことで、延命水も名の如く尊く、皆我先にミ咽喉をうるぼす。此處で約三十分休憩を興へられ梅子の一粒にさへ、母の愛を感じつゝ、楽しくお晝のおむすびを戴く。

皆お腹が出来たので元氣を回復して頂上を目指して進む、や、しばらく平坦な道を行くと、少々して一步々々進んで行

く、私達の隣を、木の間を通つて來た冷い風が、緑の香りを添へて心地良さを感じる。かくして進むここ二じ間にし合ひつゝ、一步々々頂上に近付かうと勇氣を振り起す。兩側には數百年も経たかと思はれる様な青々と苦むした老木が森々と聳え立ち、其の間を通つてゐる道は殆ど一直線に上へ上へと延びてゐる。いよいよ深く高く進むにつれ倒れた巨木が、只さへ狭い道を意地悪くも私達の行く手をさへぎつてゐる。

それに大きい石や小さいのが路傍にごつゝご轉がつてゐる。次第々々に私達の顔にも疲労の色が浮んで來た。

いつの間にか後から來た千代村の人達に追ひ越されてしまふ。

今は只金剛杖のみを頼りに、やうくにして伊勢瀧へ到着する。

暫く清らかな涼しいシブキに体の疲れを安め又々進む。七合目ご思ふ頃高く聳ゆる木々の間から、遙か上方に眞白い雪渓を眺めたときは、私達は今迄の疲れも忘れたもの、如く只頂上の近くなつたことを喜び合ふ。

でも途は相變らず険悪を思はせてゐる。

「あー！這松だ」云ふ詫かの聲に不圖顔を上げる。今迄の坂道もいつの間にか過ぎて、一面に這松の生ひ茂つた所へ出る。足許から續く這松の上を一寸滑つて見たい様な衝動にかられる。

此處で一休みして又進む。道史教育發行を終り賀壽

眞夏の大陽は頭上に大地も溶解せんばかりに輝き、見るさへも灼熱地獄、蟬の聲のみが微かに、農民は汗と土と肥とにまみれて保証出來ない生活に不安な鍼を握つて喘ぐ多忙期、亦未曾ゆうの飢餓に直面して莫大なる費用を投じた大なる資金の援助を賜はりて此處に始めて不完全ながら、『龍丘村教育史』を桐林青年會調査部に於いて發行するを得た。

龍丘村教育史は何故に發行したか？因より自分達は持前の道樂より、古代文藝の調査をして古詩歌人藝術家の家庭を慰訪して資料を蒐集し終らんこせし折ながら『小より大へ』の諺通り村史の發刊を急據思い立ちしも資金無く其の一部分が平らな所からや、下りになつたこ思ふ。突然濃ヶ池が眼前に展開する。

て
雪渓に差れる。
雪！と思つただけでも高鳴るのを覺える。
斜面を數間の中で一直線から下へ滑り落ちてゐる。
雲渓の上を、只一人通されの中に付けられた道、
ある教育史の發刊へこむ
曲げたのであるが、過去の先端を歩み來る
年教育界の先端を歩み來る
村の教育状態を併せてせんじ
屋教育の状態を郷土史の
端を理解ある村民の感
うに研究資料に供せんじ
念願からである。
稿に筆を染めてより僅く
四ヶ月、中田先生の
月に亘りて調査したるよ
の資料を借用し此れを基
に調査を進めたれども、
相當の困難は免れず、西
東に、學校に役場に木室
な頭腦を筆で以つて、此
誤謬欠陥は生じたれども、
仕ごと故に幾多の徒勞を
り、これによつて亦幾多
災によつて以前の資料を
山者、み興へられた一つ
張した氣持になつて、一
歩踏みしめて行くこ
さ誇らしさ快さ此の氣持
殊に明治三十七年小学校
災によつて以前の資料を

少しばかりたり岩又岩をき金剛身仕度ひ朝食を出る午前六時ごろ影に淡して咲ぞきながら東方の連峰、流れ込める眼に入光景を其の言雄大な暫く後愉快な屋へこ小屋でかい番午前八付く。岩石ば用心しする。實にきの高山く調和る。限りなの中へ何とも氣持を

かりの溜り水に顔を洗ふ。枝を力強く持つて小枝を整えて焼印の香もする。半先づ本岳へ向う。其の間を上つたりて廣い所へ出る。してゐる小さい石で、かな黄色をかくす様にしてゐる高山植物を。本岳に着く。身をなす。南方の南駒ヶ岳、深んだ谷、そしてそこ銀白色の帶。

つて來た之等の壯大さ何にたゞへたら良い。葉を知らないのであるが、景さしか云はれな皆は一種云ひ知れない氣持に満たされつゝ、親切に入れてくれたやうに咽喉をうるほしきよ／＼下山の途かりの狭い道を足許一つ、元氣にお花畠に達する。れいなお花畠、赤黄紫植物が綠色の遠松に沿つて更にあでやかであります。云はれない仲、こじらめく感じつゝも名残を惜しむ。い喜びに満たされて甘い腰を下す。

日常社會生活の中にて痛感する矛盾や、不正や痛憤すべき記じ其他、短文のこゝ紙上匿名隨意載否は一任を乞ふ

反對宣言

養蠶時の電燈

痛感坊

◆組合の電氣であるが故に吾々組合員、特に養蠶家は幾多の便宜に預り、痛感坊も勿論のこと全組合員が満足してゐること、思ふ。

◆只一つ……組合の電氣であるが故に遠慮會釋なく我儘を言はして頂き、養蠶家のために宜敷御研究され、便宜を計つて頂き、よりよき組合の電氣、よりよき俺達の電氣たらしめて貰ひたいと思ふ。

◆春蠶さきなんかの曇つた朝又は雨の日の暗つたいき或ひは寒くて余り外氣に觸れたくない即ち戸を早く開けたくない朝等に早く消燈されることが一番困りきる。

◆要は必ず日の出るまで消燈せざること、又曇つた朝、雨の朝等は相當明るくなるまでは必ず消燈は眞平です。

夕方の點燈なんか、勿論のことを注意して頂きたいし、又養蠶に限つた譯でもない。

◆電力の節約云ふこそもあるだらうが、自分が養蠶家になつた様な氣持で、消燈、點燈に氣を配つて、全組合員が充分満足のいく様心掛けて頂きたいものである。

ここを誇りにあへぎくつ、
進んで白樺の林へ来る。曲
りくねつた白樺の根が遠慮な
く伸びて道をふさぐ。
大部疲れた足を引すりく奇
麗に咲いたお花畠を兩側に眺
めつゝも、摘もうともせず、
數回の休憩の後やうくにし
て、白樺の林を上り切つてし
まふ。

こそかに坐してゐる此の池が、其の碧い面に波紋一つ立てず、静かに湛へて居る様は、之等の高山でなくては味はふこころの出来ない幽玄の感に打たれる。

私達の心を深くつかんで離さない此の池も別れを告げて頂上へ向ふ。

間もなく大きな期待を持つての雲霧へと進む。

の云ひ知れぬ感じであらう
雪渓を過ぎるといよく崖
ばかりの道となる。
稍もすれば崩れ落ちよう
る、石の上を疲れた足にさ
ごの力をこめてよぢ上る。
這松^{シラカシ}岩石^{イリガシ}この列つてゐる
斜面^{カタマリ}を私達は五六間歩いては無
止り又氣を取り直しては舞
夢中で進む。

右石
いを見るこもう七じを過ぎて
ゐる、やうやく元氣を出して
黄昏の道を小屋へ向ふ。
やがて小屋に付いて裝身具
切を片付けて夕食を済まし、
夜を通じてたくみりの煙を
避けながら外へ出る。晝
中こはずつと異つて寒さがひ
しきこおしよせて来る。
之でも真夏かと思はれるほど

かしら
ら』等
合ひな
だが二
は雨は
ら止つ
方の山
ここが
光も拜
たゞ霧

『さうね駄目か
同じ様なこを云
がら又寝に付く。
度目に自覺めたさき
もう上んでゐたが麓
て來る朝霧のため、一
々は思ふまゝに眺め
出来ず殘念ながら御
まれなかつた。

んで此處を後にする。
いつしか懐しい這松が影を消して森林帶へ走入る。
下り坂の道を足に力を入れて熊笹の中を夢中で下りほこりまみれの体を赤穂へ到着。皆安心ご疲ごで只呆然ごとして午後三じ三十八分の電車で夫々歸途に付く。